

絵本と生育歴

一乳児院で養育されている幼児への 絵本を手がかりとした早期介入の試み—

大曾根 貴 子^{※1}，川 瀬 良 美^{※2}

本研究では対象絵本「あさになったので まどをあけますよ」（荒井，2011）に拒否反応を示したA乳児院で養育されている幼児について，川瀬（2015）で提出された仮説に基づき心理臨床的介入と生活場面での環境療法による支援を実践する。その効果から仮説の妥当性を考察し，対象絵本を指標とした乳幼児期早期での心理臨床的介入の意義を明らかにすることを目的とする。

対象絵本への拒否反応を示した3名の入所児童に対して生育歴，行動観察，アセスメント結果から明らかになった問題点に焦点をあて，臨床心理士による心理療法と保育士による環境療法によって当該問題の軽減あるいは解消を図り，対象絵本への反応の変化の有無を確認した。その結果，3ケース共に改善が見られ対象絵本の反応を手がかりとした早期支援の有効性を明らかにすることができた。

キーワード：生育歴，絵本，乳児院，被虐待児，アタッチメント

1. 問題と目的

本研究は乳児院で養育されている幼児が，世界的に高い評価を得ている絵本に対して拒否的な反応を示した事から，その原因が生育歴と関連しているのではないかとの仮説に基づいて研究を実施した。

多くの子どもが楽しめる絵本が楽しめないという事実は，単に絵本を楽しめないという問題のみならず日常生活での感覚受容や情報処理での困難や苦痛を示唆するものと考えられた。言語発達の未熟な乳幼児は，そのような不快な状態を伝えることに困難があると推察されることから，

※1 淑徳大学大学院総合福祉研究科社会福祉学専攻博士前期課程修了 聖愛乳児園

※2 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

対象絵本に示した拒否反応を心理的支援への導入の手がかりとすることが可能なのではないかと考えた。そこで、川瀬・大曾根・大住（2015）は、乳児院で養育されている乳幼児は、直接・間接での被虐待経験があるなど不適切な養育環境を経験していることから、対象絵本を拒否することに影響すると考えられる問題について、仮説1 生育過程での絵本との出会いの無かったことの影響、仮説2 母親とのアタッチメント問題の影響、仮説3 乳児院で養育されなければならなかった被虐待経験など不適切な養育環境の発達への影響、そして仮説4 は、絵本のもつ特性の影響という4つの仮説を提出してその論理的妥当性について考察した。

親は子どもにいつ頃から絵本を与えるのかの調査によると、子どもが4か月時点で38.6%の親が「一緒にみたり読み聞かせをしている」と回答し、「きょうだいと一緒にみるとき一緒にみている」を合わせると4か月児の約6割が絵本と接していた（横山・無藤・秋田，2002）。子どもが絵本を経験する過程では、親は子どもに絵本を与え出会いの機会をつくり、発達に伴った絵本の楽しみ方を経験させるという重要な役割を果たす。その経験を通して、2、3歳頃までに本を本として楽しめる段階に到達する（秋田，2004）。親子の絵本の関わり方を、愛着尺度を用いた愛着指数の高低との関連で検討した研究によると、アタッチメントが安定している親子は、子どもを主体にしながらも、そこでの絵本を介した相互作用が生まれ、成長にともない、親主導、子主導といった行為の中で絵本の世界を楽しむようになっていく（秋田，2004）。絵本を介した母子の相互作用は、アタッチメント関係を基礎としているが、さらにアタッチメントを安定したものにする役割を果たしている。乳児院にいる乳幼児の多くは、母親とのアタッチメントを形成できなかったか、あるいは形成したアタッチメント対象を喪失するなどのアタッチメント問題を抱えている。

絵本を拒否した乳児院の子ども達が、1歳未満で親に絵本を与えられたかについては正確な情報はないが、絵本を拒否した事実は、絵本のある環境という生活においてアタッチメント形成も含めた育ち直しを経験することが必要と考えられた。

また、乳児院で養育されている乳幼児の胎児期の環境は、妊婦健診の未受診、妊娠中のタバコの摂取、飲酒、極端な場合は違法薬物の摂取などの胎児への配慮に欠ける環境に曝されていることが多い。出生後は適切な衣食住の提供や、健診、予防接種がなされないまま放置されるケースや、暴力行為、不必要な薬物投与などの不適切な関わりを持たれているケースも少なくない。このような妊娠・出生・生育にまつわるリスクともいえる状況は、発達の抑制要因となる。養護施設の3歳児の調査結果では、発達の遅滞・偏り、アタッチメント、感覚統合、あるいは獲得されたトラウマなどの問題が明らかにされている（岡田・大久保，2008）。乳児院に在籍する乳幼児にもこのような発達の全般的な遅滞や感覚に関する問題が存在している可能性が考えられ、それらの影響により絵本を楽しむことに困難を示している可能性が示唆される。

本研究での対象絵本は、「あさになったので まどをあけますよ」（偕成社，2011刊）である。

作者の荒井良二氏は、2005年、絵本作家のノーベル賞といわれているリンドグレン記念文学賞を受賞した世界的に高く評価されている注目の絵本作家である。「想像力を刺激する荒井ワールドは大人から子どもまで多くの読者を魅了している。」(NHK, 2013)と、語られる荒井氏の作品は、五感を刺激するとも評されるが、その絵は乳児院の子どもが拒否するほどの強い刺激となったのかもしれない。対象絵本は、荒井氏が東日本大震災で被災した子ども達を励ますことを目的に「希望」をテーマに作成されたものである(荒井, 2014)。表紙の配色は「希望」を象徴するに妥当であると感じられる色使いであるが、一方、描かれた花や葉に輪郭は無く、物の形態のデフォルメや抽象化の経験に基づいて認知しなければならない。そのため、この絵本を楽しむのには、成育過程での段階的に絵本と触れあう経験が必要なのかもしれない。

ところで、対象絵本への拒否反応は乳児院の乳幼児に特有な反応であるのであろうか。そこで、川瀬・大曾根(2016)は、家庭で養育されている1歳3ヶ月～2歳2ヶ月までの保育園児10名を対象に対象絵本を初めて見せた時の反応を観察した。その結果、対象絵本を楽しめたか拒否したかは生活年齢による傾向は見られなかったが、家庭で養育されていても対象絵本を拒否した1名の子どもには仮説に該当する問題があった。問題点として明らかになったのは、保育士が評定した「愛着行動チェックリスト(ABCL)」、「感覚チェックリスト日本版(JSI-R)」、「養育問題のある子どものためのチェックリスト:CMYC」による評定結果のいずれにおいても支援が必要ことが示された。この結果から、対象絵本の拒否反応を手がかりとして、前述の4つの仮説による心理的介入による支援の可能性が考えられた。

そこで、本研究ではA乳児院で養育されている幼児について、対象絵本への拒否反応を指標として、川瀬他(2015)で提出された4つの仮説に基づき心理臨床的介入と生活場面での環境療法による支援を実践し、その結果から乳幼児期早期での心理臨床的支援の可能性を検討することを目的とする。

2. 方 法

2-1. 入所児童の生活環境

A乳児院は定員20名の横割り5クラス編成で、担当養育制を導入し保育士と担当児が個別で過ごす日を月2日程度設けている。加えて月1～2回の頻度でグループセラピーを実施している。在籍児の絵本との関わりは、生後6ヶ月～12ヶ月未満は適宜提供される環境にあり、生後12ヶ月以上の幼児は1日数回の頻度で絵本や幼児雑誌に触れる機会を設けている。

2-2. 対象児の選定とその概要

本研究開始時点で心理治療の対象となっていたのは10名であった。そのうち絵本に拒否反応を

示したのは5名で、開始時は5名全員を対象とした。しかし、その内の2名は措置変更などにより中断したことから、本研究では治療を継続することができた男児2名と女児1名について報告する。3名の概要は表1の通りである。なおケース3は出生後の被虐待経験は無いが、胎児期に違法薬物濫用環境に曝されていた。妊娠中の違法薬物の濫用は虐待の法的な分類として規定はないが、広義の身体的虐待と捉え、その内容を（ ）付けにて表記している。

2-3. 仮説に基づいたアセスメント及び心理治療の実施方法概要

被虐待経験をもち対象児への係わりの基本姿勢は表2に示したとおりである。仮説によりアタッチメント形成の改善と以下のアセスメント結果に対する発達支援を基本に介入が実施された。

2-3-1. 介入方法Ⅰ：アセスメント

下記の尺度を用いて発達状態についてThがアセスメントを行った。

測定尺度：①新版K式発達検査2001（生澤・松下・中瀬，2002）

②養育問題のある子どものためのチェックリスト（Checklist for Maltreated Young Children, 以下CMYC）（泉・奥山，2009）

③改訂版感覚発達チェックリスト（Japanese Sensory Inventory Revised ver. 2002, 以下JSI-R）（太田・土田・宮島，2002）

アセスメント結果は、介入方法Ⅱ（心理療法）を開始した時点の結果と終了した時点での変化が比較できるように、新版K式発達検査2001, CMYC, JSI-Rの結果を介入前・介入後を対応させて示した（表3～表5）。

表1 ケース概要

	性別	入所時 月齢	介入 開始 時月齢	虐待の内容		
				虐待者	虐待開始 時期	内 容
1	男	0：11	1：2	実父母	生後 間もなく	・ 異父姉に対する身体的虐待の目撃 ・ 医療未受診 ・ 放置
2	男	1：1	1：10	実母	0：9	・ 打撲等の傷ができるほど叩く ・ 罵声を浴びせる
3	女	生後 5日	1：4	（実母）	（胎生期）	（・ 妊娠中の違法薬物の乱用）

表2 関わり方の基本姿勢

		保育士	心理士
仮説1	絵本のある生活の設定	・生後12ヶ月以上児は1日数回、絵本や幼児雑誌にふれる時間を設ける	・室内に本棚を常設し本人がThと一緒に絵本を読むことを望んだ場合は、それに応じて読む ・セラピー中の絵本との関わり方の観察
仮説2	アタッチメント形成	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものアイコンタクトを確認したら返事をする ・子どもの表情や仕草から読み取れる要求を代弁しながら応じる ・ベビーサイン等の視覚的手段を合わせてコミュニケーションを図る ・生活場面で子どもが輪から外れている時は名前を呼んで本人の行動に興味関心を持って声をかける ・養育担当者との関係の意識化を強める 	<ul style="list-style-type: none"> ・心理室でのThとの安定した関係の形成 ・セラピー中に対象児が困った時の行動や反応を観察する ・セラピー場面で遊びの中で本人が困った時に本人から何等かの形で助けを求める行動を待った上で代弁をして応じる
仮説3	受容的で快適な環境の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・物理的環境から不快刺激を取り除く、または調整する ・否定語を使わず具体的な行動で声をかける 	
	自傷・他害行動への対応	原則として以下の手順で対応 <ol style="list-style-type: none"> (1) 怪我の状況確認 <ul style="list-style-type: none"> * 大きな怪我を認めた場合は近くの職員を呼び処置を優先する * 被害を受けた児童がいる場合は、被害児の気持ちを大人が代弁してなだめる (2) 本児の行動の理由を大人が代弁する (3) 自傷・他害行動以外の解決方法を簡単に伝える <ul style="list-style-type: none"> * 被害児への謝罪は強要しない (4) 他の遊びに誘導して気持ちの切り替えを図る 	
	不適切な養育環境による問題の治療	・アセスメントの結果から、保育において個々の問題点への対応を行い、包括的な心身の発達を支援する関わりをする	・セラピー中に攻撃性の高い関わりや虐待の再現と思われる遊びを認めた場合は、子どもが嫌がらない範囲でThが手当てをする関わりを持ち、反応を観察する
仮説4		・発達的な絵本の選択の観察	・対象絵本に対する反応の観察

2-3-2. 介入方法Ⅱ：心理療法

頻 度：週1回程度（1セッション50分程度）

実 施 場 所：A乳児院「心理治療室」

方 法：対象児童とセラピスト（以下：Th）の1対1で実施する。内容は、生育歴と行動観察を含めた各種アセスメントを実施し、被虐待経験、アタッチメントの問題、発達検査結果、感覚機能統合等の評定結果に基づき療育的な内容と自由遊びを取り入れた。また室内に本棚を常設し本人がThと一緒に絵本を読むことを望んだ場合は、それに応じて読むこととした。

セラピスト：A乳児院専任心理士（臨床心理士）

表3 新版K式発達検査2001の結果

	ケース1		ケース2		ケース3	
	介入前	介入後	介入前	介入後	介入前	介入後
生活年齢	1:0	2:6	1:2	2:4	1:3	2:10
姿勢・運動	1:0	3:1	1:3	3:1	1:5	3:1
発達指数 (DQ)	98	123	106	124	112	108
認知・適応	0:11	2:4	1:1	2:6	0:11	2:11
発達指数 (DQ)	89	93	92	107	74	103
言語・社会	0:10	2:5	0:9	2:3	1:0	2:9
発達指数 (DQ)	80	97	66	96	78	97
全領域	0:11	2:5	1:1	2:5	1:0	2:10
発達指数 (DQ)	89	97	99	104	80	100

表4 CMYCの結果

	ケース1		ケース2		ケース3	
	介入前	介入後	介入前	介入後	介入前	介入後
年 齢	1:0	3:0	1:10	2:8	1:4	2:8
トラウマ	17*	9	14*	8	9	10
愛 着	40**	18	30*	21	33**	23
感覚・行動・調整	5	4	5	6	9**	7*
総合得点	62**	31	49*	35	51**	40

*...境界域 **...介入域

表5 JSI-Rの結果

	ケース 1		ケース 2		ケース 3	
	介入前	介入後	介入前	介入後	介入前	介入後
年齢	1:2	2:11	1:8	2:9	1:4	2:6
前庭感覚	3	16	7	14	15	9
触 覚	11	23	9	22	16	10
固有受容覚	0	4	11*	15*	1	2
聴 覚	14*	12*	10*	9	10*	17*
視 覚	6	2	9	7	15*	8
嗅 覚	0	0	0	0	0	3*
味 覚	0	0	0	0	0	0
その他	8	5	12	12	21*	11
総合点	24	62	58	79	76	60

*…若干，感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態

**…感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態

2-3-3. 介入方法Ⅲ：生活場面での関わり

保育士，看護師，心理士で表2の関わり方の基本姿勢をもとに不快感を覚える刺激の調整方法，子どもの表情や行動の代弁，アイコンタクトへの対応，自傷他害行動の対応をケースごとに検討した。その上で簡単なマニュアルを作成し，どの職員が対応しても同じ関わりが持てるようにした。

3. 結果 個別心理療法

3-1. ケースの経過と絵本に対する反応の変化

(1) ケース1：A君

【概要】

ケース1は本児に対するネグレクト及び異父姉に対する身体的虐待を理由に生後11ヶ月で入所した。A君の母親は異父姉を連れてA君の実父となる男性と再婚したが異父姉が懐かなかったため，実父から異父姉への身体的虐待が継続的に続いた。母親の話によるとA君は異父姉への暴力をしばしば目撃させられており，姉弟共に健診や予防接種は一切受けていなかった。

【介入前の様子とアセスメント結果】

ケース1は1歳2ヶ月から支援を導入し現在も継続中であるが、本研究では3歳6ヶ月までを報告した。A君は入所当初から男性や暗がりに対する恐怖心、夜間の中途覚醒の多さが見られていた。また入所2ヶ月を経過した頃から、他児の泣き声を聞くと無表情になる、困った時に助けを求められずに固まる、ストレス過多状態になると眠る行動が見られた。

発達検査の結果は概ね標準域の数値を示していたが、「言語・社会」の発達指数(DQ80)が全体に比べてやや低かった。CMYCの得点は「愛着」が介入域、「トラウマ」が境界域を示し、総合点で介入域であった。JSI-Rは「聴覚」が若干、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態を示した(表3～5参照)。

【見立て】

入所経緯と行動観察及びアセスメント結果から、A君は不安や恐怖を覚えた際に守られる経験が少なかったために健康的なアタッチメント行動を獲得できず、助けを求められずにストレス過多時に眠る行動に繋がっているのではないかと考えた。

またJSI-Rの聴覚の得点が高いこと、男性や暗がりに対する恐怖心、夜間の中途覚醒、他児の泣き声に対する反応は虐待場面に曝されていたことによるトラウマ反応の可能性を考えた。

【支援計画】

A君が安心して生活できるように①生活空間内の被虐待経験を想起させる刺激の調整を行い、アタッチメント形成を目指すために②不快刺激に対して職員が側について安心感を持たせることと、③アイコンタクトや動作の代弁、④ベビーサインを用いた会話に取り組み、発達経過を観察することとした。

【経過】

＃1～＃7 (1歳1ヶ月～1歳5ヶ月)

この間はThに視線を向けることなく1人で遊ぶ行動が目立ち、玩具を上手く扱えないと諦めて別の玩具を探すことを繰り返していた。ThがA君に声をかけると遊びを中断し、その場から立ち去ってしまうことも多かった。絵本は初回時から興味を示したが、対象絵本だけは棚に存在しないかのように見ることも手に取ることもない状態が続いた。1人で絵本を読むA君にThが<一緒に見てもいいかな?>と声をかけると無言でThに背を向けることが続いた。

生活では常に強張った表情で過ごしており、職員が声をかけても反応が弱かった。

＃8～＃16 (1歳6ヶ月～1歳10ヶ月)

この間も一人遊びが中心ではあったが、Thが声をかけた際に遊びを中断することが減り、Thにアイコンタクトや仕草で訴えるようになった。しかし困った時のサインは見られなかった。

この時期は好みの絵本が明確になったものの、対象絵本は変わらずに手に取ろうとしなかった。＃8で絵本を手に取ったA君にThが<一緒に読もう>と声をかけると、A君がThの膝に座

り、#9以降はA君からThの膝に座って絵本を読むようになった。

生活では担当保育士やThを見かけると笑顔で近寄ってくるようになったが、ストレス場面では突然眠ってしまう状態だった。また、この頃から傷の手当を嫌がる傾向も見られ始めた。

#17～#29（1歳11ヶ月～2歳3ヶ月）

#17以降はThとのやり取り遊びが増え、困った時は愚図って知らせるようになった。絵本は好きな本を繰り返して読むようになったが対象絵本だけは手に取ることは無かった。

生活では暗がりや男性への抵抗、夜泣きが軽減し、ストレス過多時に眠ることが無くなった。また担当保育士やThへの後追いが見られるようになった。

#30～#46（2歳4ヶ月～2歳8ヶ月）

この時期になると困った時に言葉で伝えるようになった。終了渋りが顕著になり、終了時間が近いことを伝えるとA君がThにしがみついで泣き始めることが続いた。ThはA君を抱き抱えて落ち着くまで待ち、生活スペースに戻ることを繰り返した。

この時期になるとThの膝に座る際に、以前よりもゆったりと体を委ねられるようになった。また#39時に初めて対象絵本を選び、絵本の中の車を見つけて興奮気味に「ブーブ!」と言ってThの顔をのぞき込んできた。Thが＜A君の好きな車があったね＞と返すと満足そうに笑い、次々に車を見つけてThに教えてくれた。#40～#46は毎回、対象絵本を読み、徐々に絵の全体を捉えるような発言が見られるようになった。

生活では表情が豊かになり、担当保育士を見かけると笑顔で駆け寄り、不安な時は近くにいる職員にしがみつくようになった。また暗がりを怖がる行動が消失し、夜泣きの頻度も減った。またセラピーと同様に担当保育士との別れ際に愚図るようになった。

#47～#56（2歳9ヶ月～3歳）

この頃から絵本を選ぶことが減り、事故のようにミニカー同士をぶつける、壁に追突させる遊びが目立つようになった。またThの持っているミニカーにA君のミニカーをぶつけてくることも多く、そのたびにThはミニカーを修理した。そしてThが＜A君の車も直す？＞と声をかけると、A君はミニカーを背中に隠して何事もなかったかのように遊び始めることを繰り返した。

生活では入所当初に見られた行動がほとんど改善したが、傷の手当への抵抗がまだ見られていた。

#57～#70（3歳1ヶ月～3歳6ヶ月）

セッション中に絵本を選ぶことが無くなり、ThにA君のミニカーの修理を頼むようになった。

#67からは遊びの内容が大きく変わり、工作道具を使って「A君の街」を作るようになった。街づくりを始めてから終了渋りは見られなくなった。

生活でも担当保育士と別れる際の渋りが減り、傷の手当を受け入れるようになった。また興味の幅が広がり、本人にとって安心できる職員が増えた。

【アセスメント結果の変化】 CA：2歳6ヶ月時点

発達検査の結果は「姿勢・運動」(DQ98→DQ123)と「言語・社会」(DQ80→DQ97)の伸長が大きかった。それに伴い「全領域」の発達指数も伸長が見られた(DQ89→DQ97)。CMYCは全体的に介入後の得点に減少が見られ、全て正常域の得点となった。JSI-R(2:11時点の評定)の「聴覚」の得点は介入後に下がったものの、偏りのある傾向を示した(表3～5参照)。

(2) ケース2：B君**【概要】**

ケース2は実母からの身体的虐待及び養育困難を主訴に1歳1ヶ月で入所した。B君が生後8ヶ月で父母が離婚し、それを機に母親は夜間帯の仕事を始めた。しかし母親は「自分がこのような目にあっているのは子どものせい」と感じるようになり、B君への暴力と暴言が始まった。その数ヶ月後に母親自ら警察に相談し施設入所となった。

母子手帳の記載を見ると妊婦健診を定期的に受診しており、父母が離婚するまではB君の健診、予防接種共に定期的に受けて成長の記録も記載されていた。その内容からは、一定の時期まではB君への愛情をもって子育てに努力していた様子が伺えた。

【入所当初の様子】

入所日は母が付添い、母親の抱っこから離されるとB君は激しく泣き叫んだ。その後、数日間にはB君の愚図り泣きが頻回に見られた。B君は入所当初から新奇場面で激しく泣き叫ぶ、アイコンタクトが少い、輪から外れて1人でのいる、過食行動が見られた。また発語・発声が月齢に比べると少なかったため、小児科での経過観察を開始した。

【介入前の様子とアセスメント結果】

ケース2は1歳10ヶ月から、家庭復帰によって退所した2歳9ヶ月まで支援を導入した。導入時は有意語が2～3語のみであった。1歳半を経過した頃から他児や自身の体を血が出るまで強く噛む、抜毛、言葉の否定的なニュアンスを敏感に察知して固まる、困った時に助けを求めることなく諦める傾向も見られた。

母からの情報によると、B君は在宅中も外出時の愚図りが多かった。また母子手帳には「些細な物音で起きてしまう」「『キーキー』と甲高い声で泣く」「体を突っ張らせる」等が書かれており、育て難かったことが推察された。

発達検査の結果は「姿勢・運動」(DQ106)と「認知・適応」(DQ92)の発達指数は概ね標準域だったが、「言語・社会」(DQ66)の発達指数が低い状態だった。CMYCは「トラウマ」と「愛着」の得点が境界域にあった。JSI-Rは「固有受容覚」と「聴覚」の得点が若干、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推察される状態を示した(表3～5参照)。

【見立て】

B君の入所経緯，行動観察とアセスメント結果から一定期間，母親と安定した関係が築かれていたが，父母の離婚を機に母から攻撃的な関わりを受けたことで，アタッチメント形成不全にある可能性が考えられた。加えて暴言を受けた影響で聴覚の偏りや否定的な言葉に過敏に反応している可能性を考えた。

発達検査の結果からは「姿勢・運動」，「認知・適応」と「言語・社会性」の発達指数に大きな差が見られた。このことから一連の問題となる行動特徴については，不適切な養育環境による影響だけでなく，発達のな問題が影響している可能性を考えた。

【支援計画】

ケース2は不適切な養育に曝されたことと発達の問題の両方の影響を視野に入れて介入することとした。まずB君が安心して過ごせるように①新奇場面に対する調整と②否定語を使わずに的確な動詞で短く伝えること，③自傷・他害行動に対して行動の代弁を図ることに取り組んだ。また④行動とアイコンタクトへの代弁，⑤ベビーサインを用いたコミュニケーションを図り，発達と行動の変化を見ることとした。

【経過】**#1～#4（1歳10ヶ月～2歳）**

この時期はThがB君に声をかけてもThに注目することは無く，気持ちが高ぶると，手にしている物を力強くThに投げつける行動が見られた。

また無表情で赤ちゃん人形の目をシャーペンで何度も突き刺したり，絵本の間に人形を挟んで力強く押しつぶす，床に激しく打ち付けることを繰り返していた。Thが＜赤ちゃん，イテテ＞と声をかけると，口元をニヤッとさせて何度も繰り返した。B君が人形を手放したタイミングでThが＜お薬をぬってあげようね＞と言って人形の手当てをすると，B君はThの対応に拒否感を示すこと無く黙って眺めていた。

本棚の絵本は万遍なく選んでいたが，対象絵本だけは手に取らなかった。

生活では他児に興味を示すことは無かったが，担当保育士を見かけると近寄っていく行動が見られ始めた。

#5～#14（2歳1ヶ月～2歳4ヶ月）

この時期はB君がThの反応や行動に注目するようになった。しかし助けを求めるサインだけは見られず，困った状況になると諦めていた。

赤ちゃん人形への攻撃的な遊びは減り始め，#6ではB君が赤ちゃん人形にミルクをあげる関わりを持った。

絵本はThの膝に座って読むようになり，Thと一緒に絵本を見ながら不明瞭ながらも盛んにおしゃべりをする様子が見られるようになった。

生活ではB君から職員に甘える行動が見られるようになった。一方で、突然の物音や室内の装飾の変化を嫌がることが顕著になったため、突然の音には<〇〇の音だよ>と伝えること、室内の装飾を大きく変えないことを新たに取り組んだ。

#15～#28（2歳5ヶ月～2歳9ヶ月）

この時期は全体的に大きな変化があった。生活では不安な時に職員に近寄って助けを求めるようになり、他児に興味を示す行動が見られるようになった。また過食、噛み付き、抜毛行動が消失した。言葉は単語の語尾を言うことが目立ったが、それらを駆使してジェスチャーを付けながら2～3語をつないで会話ができるようになった。また他児がセラピーに行く場面を見ると泣いて怒るようになり、職員がB君を抱き抱えて悲しさを代弁し、気持ちの切り替えを図るよう対応した。セラピーでは今まで見られなかった助けを求めるアイコンタクトが見られ、Thが声をかけると笑顔を見せるようになった。

絵本はThの膝に座っての読み聞かせスタイルが定着し、#20で初めて対象絵本を選んだ。そして#26と#28で再び対象絵本を選び、#20よりも気軽な雰囲気絵本を眺め、見知ったものを指さして会話しながら読み進めた。

B君は実母との面会が順調に進み母子関係が安定してきたこと、母の生活基盤の再建が整ったことから家庭復帰となり#28で終結となった。

【アセスメント結果の変化】CA：2歳4ヶ月時点

発達検査の結果は全体的に介入後の発達指数に伸長が見られた（DQ91→DQ104）。CMYCは境界域にあった「トラウマ」と「愛着」の得点が減少し、いずれも正常域となった。JSI-Rは「固有受容覚」の得点は大きな変化が無かったが、「聴覚」は介入後に得点の減少が見られた（表3～5参照）。

（3）ケース3：Cちゃん

【概要】

ケース3は養育者が違法薬物使用により逮捕・拘留され、養育者不在を理由に生後5日で入所した。母親は10年以上に亘る薬物使用歴があり、本児を妊娠中も使用していた。

Cちゃんは新生児期から哺乳力の弱さ、易刺激性、泣き収まりの悪さ、筋緊張の亢進が見られた。これらの行動に改善が見られず生後9ヶ月時に小児科を受診し理学療法、作業療法、言語療法を受けながら経過観察を行っていた。

【介入前の様子とアセスメント結果】

ケース3は1歳4ヶ月から支援を導入し現在も継続中であるが、本研究では3歳2ヶ月時点までを報告した。導入時は自発的な有意語は見られず、助けを求めたい時に指を吸って立ち尽くす、他児と関わったり、玩具で遊ぶことなく室内を歩き回る行動が目立っていた。また肌の接触

や揺れる刺激を嫌がる傾向も見られた。

発達検査は「姿勢・運動」の発達指数（DQ112）と比べると、「認知・適応」（DQ74）と「言語・社会」（DQ78）が低い状態にあった。CMYCは「愛着」が介入域、「感覚・行動・調節」が境界域を示した。JSI-Rは「聴覚」、「視覚」、「その他」の項目が若干、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態を示した（表3～5参照）。

【見立て】

ケース3は皮膚や目、耳から入る情報の受け取り方に偏りがあることで、抱っこやスキンシップが心地良い刺激として受け取れないのではないかと考えた。また同様の理由で、外界の刺激に振り回されている状態が続き、認知面や言語、健康的なアタッチメント機能の発達を滞らせているのではないかと考えた。

【支援計画】

アタッチメント形成を図るためにはCちゃんの発達特徴に沿った生活環境の調整や関わり方の工夫を要すると考えた。そこで環境変化を最小限に抑える目的で①物理的・人員的環境の固定化を図ることとした。また②動作とアイコンタクトの代弁、③ベビーサインを用いたコミュニケーションを図って発語と相互的なやり取りの伸長を図ることとした。

【経過】

#1～#5（1歳4ヶ月～1歳7ヶ月）

この時期はThに目を向けることなく、室内の玩具を手にとって床に捨てることを繰り返していた。

絵本は初回時に興味を示し、Thの膝に座って読み聞かせに応じた。対象絵本も選んできたが、劇的な拒否反応を示した。Cちゃんは対象絵本を開いた瞬間にパッと手を離して絵本を床に落とした。そしてThの膝から立ち上がって強張った表情で室内を落ち着きなく歩き始め、手あたり次第に玩具を口に入れては出すことを繰り返した。Thが対象絵本を見せ「読まないの？」と聞くと、Cちゃんは絵本から遠ざかるように部屋の隅に行って座り、うつろな表情で頬張るように玩具を口に入れ始めた。Thが口に玩具を入れようとする手を止めた途端に「ギャー」と怒ったような怯えたような声を上げて床にひっくり返って手足をばたつかせた。#2以降になると対象絵本を目にすると愚図り始め、室内を歩き回って遊べなくなった。そのため対象絵本は本棚から外してセッションを行うこととした。

生活では担当保育士を見かけると駆け寄るようになった。しかし他児が先に担当保育士に抱き付いてしまうと諦めて引き返してしまう状態だった。

#6～#17（1歳8ヶ月～2歳）

#6以降は少しずつThの行動や言葉を真似たり、嫌な時は「バイバイ」と言って意思表示できるようになった。しかしThがCちゃんの思った通りの対応をしないと甲高い声あげて怒った。

本棚から対象絵本を外すと抵抗なく絵本を選ぶようになり、好みの本を繰り返して読むようになった。読む時はThの膝に座ることもあれば、1人で床に座って読むこともあった。#15に再び本棚に対象絵本を入れたところ、すぐに気づき、手に取ったが棚に戻して自分の好きな絵本を選んだ。#16以降は本棚に対象絵本がある事に気づいても、不快感は示さなかった。

生活では担当保育士を中心に職員に甘えられるようになった。その一方で大人や他児に話しかけたい時に相手に物を投げつける行動が見られ始めた。

#18～#29（2歳1ヶ月～2歳7ヶ月）

この時期は実母との面会交流の開始を機に生活全般が落ち着かない状態となった。

セラピーではThの顔を伺いながら玩具を口に入れるようになった。ThがCちゃんの手を止めようとすると強い口調「ダメ!」と言ってThに背を向け、玩具を壊し始め、数分後には部屋から出て生活スペースに帰ることを繰り返していた。絵本を読むことも減り、Thと一緒に読むことは強く拒否するようになった。

生活でも突然の癇癪が増え、落ち着かない状態が続いた。特に実母との面会後は不安定になりやすかった。同時期に他児の頬に爪を立てる行動も頻回に見られるようになった。

そこで外出とセラピーの頻度を減らし、養育に当たる人員配置を少人数で固定し日常生活に大きな変化が生じないよう再調整を行った。他害行動には気持ちの代弁を継続した。

#30～#37（2歳8ヶ月～2歳10ヶ月）

この時期から少しずつ落ち着きを取り戻し始め、#30からは途中退室せずに過ごせるようになった。またセラピー中に本人の苦手な物を見つけるとThと一緒に逃げるようになった。そして#35からは逃げずに自分から「これは嫌だから、〇〇したい」と解決策を言えるようになった。

絵本は再びThの膝に座って読むようになり、#30で対象絵本を読んだ。その後#35でも対象絵本を選びThの膝に座って表紙を見た。すると一瞬固まり、裏表紙に返したがThが<犬だね>と分かりやすい形態の物を指さすと、Cちゃんの体から力が抜けて対象絵本を読み始めた。その後#37でも対象絵本を選んでThと一緒に読んだ。

生活でも苦手なことや不快刺激を「怖い」と言って職員に知らせるようになった。癇癪が激減し他害行動が消失し、面会後も落ち着いて過ごせるようになった。

#38～#46（2歳11ヶ月～3歳2ヶ月）

この時期から絵本を選ぶことはなくなり、赤ちゃんを看病する遊び（CちゃんとThが協力して赤ちゃんを看病して回復させる）が見られるようになった。

生活では癇癪が消失し、母親に対する拒否感が緩和し始めた。

【アセスメント結果の変化】CA：2歳10ヶ月時点

発達検査の結果は介入後に「認知・適応」（DQ74→DQ97）と「言語・社会」（DQ78→DQ97）

が大きく伸びた。CMYCは介入後に「愛着」の得点が正常域まで下がった。「トラウマ」の得点も下がったものの、境界域に留まった。JSI-Rは「視覚」と「その他」が介入後に得点が下がり正常域となった。しかし「聴覚」と「臭覚」の得点は若干、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態となった（表3～5参照）。

3-2. 対象3ケースのアセスメント結果

各種検査の結果は表3～5の通りである。新版K式発達検査2001の結果は介入前に最も近い時期の結果を、介入後の結果は問題行動等に改善または対象絵本への好転反応が見られた時期に近い結果を用いた。全ケースにおいて「認知・適応」及び「言語・社会」領域の発達指数に伸長が見られた。

CMYCはケース1及び2は、介入前は「トラウマ」と「愛着」の得点が境界域または介入域といった高い得点を示したが、介入後は全て正常域まで下がった。ケース3も介入前に比べると介入後の得点に減少が見られたが「感覚・行動・調整」は境界域であった。

JSI-Rはケース1では介入による大きな変化が見られなかった。ケース2は「固有受容覚」に変化は見られなかったが、「聴覚」の得点が減少し正常域となった。ケース3は「視覚」と「その他」が介入後に正常域となったが、「聴覚」と「臭覚」の得点は介入後に若干、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態となった。

4. 考 察

4-1. 対象絵本への反応に変化をもたらした要因

川瀬他（2015）で提出された4つの仮説に基づき心理臨床的介入と生活場面での環境療法による支援を実践した。具体的にはアセスメントによって対象児の問題点の有無を明らかにし、仮説1ではプレイルームでの絵本の導入、仮説2ではアタッチメント形成または修復へのアプローチ、仮説3では被虐待経験のトラウマと感覚機能統合問題へのアプローチを総合的に実践した。そして仮説4では対象絵本への反応の経過を観察した。

まず仮説1の検証として、本研究では相談室内に本棚を設置し、その反応の観察と絵本をThと共に楽しむ経験を重ねる中での経過を観察した。その結果、全ケース共に支援開始当初は絵本を手取る行為が見られたものの、対象絵本には興味を示さない、または拒否感を示す状態だった。そしてプレイセラピーが進むにつれて徐々にThと絵本を共有することができるようになり、対象絵本を読む反応が見られ始めた。これらの反応から、絵本を大人と共に楽しむ経験を保障し発達段階に応じた絵本を介した相互的関わりを繰り返すことで対象絵本への反応の変化をもたらすと思われる。

次に仮説2の検証では、生活場面での環境設定と個別心理療法を通じて安定した2者関係の構築に努めた。アセスメント結果を見ると全ケース共に支援導入前はCMYCの愛着の得点が境界～介入域を示しており、何等かのアタッチメント形成不全状態にあったことが分かる。そして支援導入後には、いずれも正常域まで得点が下がっていた。また生活場面においても特定の養育者への後追いや、困難時に養育者に助けを求めるといったアタッチメント行動を示し始めた時期で対象絵本を受け入れる反応が見られた。よってアタッチメント問題の改善は対象絵本への反応の変化をもたらすと考えられる。

仮説3の検証として、グループセラピーにおける感覚刺激を入れる遊びと生活場面での不快刺激の調整を実施した。ケース1ではJSI-Rの結果に改善は見られなかったが、生活では暗がりへの抵抗や、夜間の中途覚醒、傷の手当に伴う身体接触への抵抗の軽減が見られた。ケース2ではJSI-Rの「聴覚」の得点は下がったが、「固有受容覚」の得点は上がった。しかし生活では過食、噛み付き、抜毛行動の消失が見られた。ケース3ではJSI-Rの「視覚」と「その他」の項目の得点が下がったが、「臭覚」と「聴覚」の得点は上がった。一方で生活では不快刺激に対する言語化及び回避方法を身に付けるまでに至った。これらの感覚受容に関する問題行動の改善も対象絵本への反応に変化をもたらした可能性は考えられる。

そして被虐待経験のトラウマのケアとして攻撃遊びや行為が見られた際に「手当て遊び」を取り入れ、「傷つきと回復」を1連の流れとして意識的に導入した。また「お世話遊び」や「治療遊び」をThが見せ、それに対する反応を観察した。

ケース1では、ミニカー遊びを通じて「ケアの回避・拒否」から「ケアを受け入れる」遊びへの展開が見られると同時に生活場面においても同様の変化が見られた。ケース3ではセッションが進むにつれて「治療遊び」の展開を認めている。いずれも対象絵本を受け入れた後に、このような遊びの展開が見られたことを考えるとケアを受け入れる感覚の育ちと対象絵本の受け入れには関係があることが示唆される。

仮説4の検証として、支援導入後の対象絵本に対する反応の経過を観察した。全ケース共に介入当初はThの関わりに拒否的な姿勢が見られていたが、徐々にアイコンタクトや相互的なやり取りが見られるようになった。同時にThと一緒に絵本を読む姿勢が見られ、不安を覚えた際も適切に訴えられるようになった。生活でも担当保育士を中心に大人を安心の拠り所とする反応が見られ、トラウマ反応や自傷・他害行動の軽減ないし消失に至った。そして終了泣きや後追いに見られる、不安や悲しみを大人に抱えてもらう経験を経た後に対象絵本を読むに至った。これらの経過はアタッチメント形成の過程として見ることができる。

対象絵本は一般的な幼児向け絵本とは違い、輪郭が無く、色彩も部分的に色と色が重なり合っている。そのため瞬間的に見た時は、どんな絵が描かれているのか分かりにくい曖昧な刺激で対象児に何等かの不安を与えたと思われる。支援導入前の3ケースはアタッチメント形成が安定し

ておらず、アタッチメント行動が成立しにくい状況だった。そのため、不快刺激をもたらす対象絵本を拒否または回避する以外の関わり方は難しかったのではないだろうか。しかし支援導入に伴い、環境調整や個別心理療法を通じて、アタッチメント行動の獲得が促されたことで、不安を感じる刺激に対しても安心できる人と共にその刺激に身を委ねる力が育まれたと思われる。以上のことから対象絵本の受け入れにはアタッチメントの形成が大きく関わっていると思われる。

4-2. 絵本を用いる効果

絵本に対する各ケースの反応を見ると、当初は絵本が単に刺激を与える物という反応が中心だったが、徐々にThとコミュニケーションを図るツールへと変化した。つまり絵本を通じてThと感情の共有を図れるようになり、対象絵本を受け入れる過程が見られた。これは絵本の読み方の発達過程をたどっているのであるが、幼児を対象としたプレイセラピーにおいて、絵本がコミュニケーションの伸長や改善を図る素材としての有用性が考えられた。また、絵本を介したThとの相互的關係は心理室でのアタッチメント形成といえ、絵本が心理治療を次の段階に導いていく媒体となることを示している。

その例として、ケース1と3については対象絵本を読むようになった後、セラピー中に絵本を選ぶことが減り、独自の遊びの展開が見られた。ケース1では「ケアの拒否・回避」の遊びから「ケアを受け入れる」遊びへの展開が見られた。ケース3は「治療遊び」を展開し始めている。いずれも被虐待経験のある児童の治療という視点では意味のある展開である。

特に対象絵本に対する拒否反応は、対象絵本以外の環境刺激に対しても他の子ども達と受け取り方が異なる可能性が考えられる。本研究においても3ケース共にJSI-Rの結果に何等かの偏りを認めていた。特にケース3では乳幼児が喜ぶ抱っこなどの関わりが、本人にとっては不快刺激であったことが対象絵本に対する拒否反応をきっかけに明らかとなった。その結果をもとにケース3の乳児院内における具体的な支援方法を見出すことができた。このことから、対象絵本に対する拒否反応はその子どもが抱える様々な問題を知る手がかりとして活用できる可能性がある。

4-3. 乳幼児への心理臨床的介入の意義

各ケースともに生活の環境調整と個別心理療法を導入した後に一連の行動に改善が見られ、アセスメント結果にも伸長や改善が示されたことから一定の効果はあったと思われる。

「安心できる生活」と「安心できる場所」が確保されていなければ、生理的にも心理的にも安定した生活リズムが形成されず、子ども達は慢性的な過覚醒状態に陥り、常に周囲を警戒し、「臨戦態勢」を取ることになる(西澤, 2013)と言われるように社会的養護における「安心と安全の保障」は重要な要素である。今回の生活の環境調整は対象児に安全な生活を提供し覚醒状態の緩和に作用したと思われる。

また対象児は生育歴から自身の訴えや困難、不快感を適切に受け止められ、改善できたと思える経験が少なく、その影響で大人への注目や自身の要求を伝える弱さに繋り、コミュニケーションの発達全般を滞らせていたと思われる。このような状況に対し、生活場面において常に子どもに目が届く配慮に加え、特定の大人との関係性の中で、あるがままの自分を認めてもらう経験を通じて、新生児期から培われるべき「基本的信頼感」の形成に寄与したと思われる。

また自傷・他害行動への対応は、乳児院全体で統一した方針で取り組むことで職員によって生じる対応の差を少なくし、行動とそれによって得られる結果を明確にし、行動変化をもたらしたと思われる。

5. 結論と今後の課題

川瀬他（2015）の4つの仮説に基づいた生育歴とアセスメント結果について、幼児期の早期に乳児院での生活環境調整と個別心理療法を行った結果、3ケース共に改善が見られた。本研究の結果から、特定の絵本への反応を手がかりとしてアセスメントに基づいた早期支援の有効性を明らかにすることができた。また対象絵本を手がかりとした早期介入の可能性は、乳児院に在籍している幼児のみならず家庭で養育されている幼児にも起こる反応であることが明らかにされており（川瀬・大曾根，2016）、対象絵本が乳幼児への心理臨床的早期介入の指標としての汎用的可能性が示唆されている。

しかし今回の研究では、絵本がセラピールームで心理療法の媒体として有効であることは明らかにできたが、対象絵本の持つ本質的な機能の解明には至っていない。今後は対象絵本に拒否感を示さなかった乳児院在籍児童の生育歴、発達状況、乳児院での適応状況、セラピーの進捗を分析、比較することで対象絵本の持つ本質的な機能の解明を試みていきたい。加えて今後、さらにこのテーマでの研究を継続し、絵本を用いた被虐待児への心理臨床的介入の意義を明らかにしていきたい。

文 献

- 秋田喜代美 2004 「子どもの発達と本 市民による読書ネットワークが支える対話的読書」寺内一郎（編）『発達 特集 子どもと本の出会い』：1-7.
- 荒井良二 2011 『あさになったのでまどをあけますよ』偕成社.
- 新井良二 2014 『ぼくの絵本じゃあにい』NHK出版新書.
- Bus, A. 2003 "Joint caregiver child storybook reading: A route to literacy development" in Neuman, S. & Dickinson, D. (Eds.) Handbook of Early Literacy Research. New York: The Guilford Press: 179-191.
- 星野崇啓 2005 「分担報告書 被虐待児の愛着・トラウマと感覚統合障害との関連性に関する

- 研究』『奥山眞紀子（主任研究者）厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）児童虐待等の子どもの被害，及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究，平成19年度報告書』：665-680.
- 生澤雅夫・松下 裕・中瀬 惇編著 2002 『新版K式発達検査2001実施手引書』京都国際社会福祉センター.
- 泉真由子・奥山眞紀子 2009 「養育問題のある子どものためのチェックリスト(Checklist for Maltreated Young Children: CMYC) の開発」『小児の精神と神経』49：121-130.
- 川瀬良美・大曽根貴子・大住真理 2015 「絵本と生育歴との関連について—乳児院で養育されている幼児への絵本を手がかりとした文献的考察」『FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌』8：18-25.
- 川瀬良美・大曽根貴子 2016 「絵本と生育歴—家庭で養育されている幼児の反応についての検討—」『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』23：23-38.
- NHK（編） 2013 『趣味Do楽 荒井良二の絵本じゃあに』日本放送協会 NHK出版.
- 西澤 哲 2013 「第4章 子ども虐待と児童養護施設におけるケア」杉山登志郎（編）『子ども虐待への新たなケア』学研：56-71.
- 岡田洋一・大久保貴子 2008 「分担研究報告書 被虐待児の愛着・トラウマと感覚統合障害との関連性に関する研究」『奥山眞紀子（主任研究者）厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）児童虐待等の子どもの被害，及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究，平成19年度報告書』：681-703.
- 太田篤志・土田玲子・宮島奈美恵 2002 「感覚発達チェックリスト改訂版（JSI-R）標準化に関する研究」『感覚統合研究』9：45-55.
- 横山真貴子・無藤 隆・秋田喜代美 2002 「同一絵本の繰り返し読み聞かせの分析(2) —繰り返し読まれている時期と絵本の特徴—」『日本教育心理学会大会発表論文集』：136.

The Children's Life History and Picture Books: A Report on the Case Studies of Three Abused Children in Infant Care Facilities

Takako OOZONE

Kazumi KAWASE

The picture books of Ryoji Arai are popular in some respects. However, in the cases of his picture book, "Here, There Comes the Sun" it was found that some abused children in infant care facilities responded differently and rejected the book. It was decided to carry out psychological therapy by a psychologist and environmental therapy by a nursing teacher for three abused children who were being cared for in infant care facilities in order to improve their developmental conditions.

The results showed that these interventions by 4 hypotheses (Kawase, 2015) made positive changes in their responses to the picture book and the developmental conditions.

The author concluded the following from the study. It could be possible to employ the characteristics of this picture book to differentiate between those children who are in need of psychological treatment and those who are not.

Keywords: Life History, Picture Book, Infant Care Facilities, Abused Children, Attachment